

第2部会

は空虚と言える。実存による充実、すなわち歴史的な現実の中の自己存在による遂行、が必要と考えられる。個々の暗号により生を送る実存によるその暗号の止揚が行なわれれば、個々の暗号をそのつど無化することそのものが、実存の歴史性の承認という意味を持つ。なぜなら、そのつどの暗号を自らにとって唯一の現実と受け取るとは、それが歴史的で唯一絶対ではないが故に、歴史的な実存にとつては決定的であるという承認が必要と考えられる。普遍妥当な絶対性ではない、歴史的な無制約性や、超越者への連携の意識と自らの歴史的限界の意識を伴った充実が、存在の思弁により可能になると言えるだろう。

このような「存在の思弁」の論考により、実存と超越者の関係における思惟の機能が、暗号を純正ならしめるものとして、より積極的に捉えられるようになったと言える。また、個々の暗号が歴史的にのみ意味を持つことが承認されることにより、ヤスパースの主張する「理性による開かれた信仰」が基礎づけられたと言えるだろう。

脱宗教的精神性としての

ヤスパース「哲学的信仰」

大沢 啓徳

「脱宗教的(世俗的)精神性(vulgar spirituality)」とは、

ダライ・ラマ十四世が提示する概念である。もしすべての人間に、他者を愛し慈しむという性質、すなわち仏性が備わっているならば、それは仏教徒だけの問題ではなく、すべての人間にとつての関心事でなければならない。しかし、宗教の教義として語られる限り、それは、宗教に対して興味を示さない、或いは宗教に対して拒否的な人々に、受け容れられることはないだろう。そこで、宗教という限定を離れ、各人を、各人が本来的に有している形而上学的な精神性へと差し向ける一つの方法として、ダライ・ラマは、この概念に期待するのである。

実存哲学者・ヤスパースの主張する「哲学的信仰(Der philosophische Glaube)」とは、まさに、このような精神性への喚起に他ならない。そこで本発表は、ヤスパースの「哲学的信仰」の構造と射程とを明らかにすることによって、「脱宗教的精神性」という概念の可能性に寄与することを目指した。

「哲学的信仰」は、或る教義によつて規定されるものでもなければ、特殊な経験を必要とするものでもなく、ただ、我々の常識的な思惟の遂行によつて、人間の在り方を把握し、超越的なものに触れようとする試みである。そのための思考訓練としてヤスパースが導入したのが「つつむもの(das Umgreifende)」という思想である。

ヤスパースによれば、人間は、現存在・意識一般・精神・実存という側面を持ち、また人間が存在することによつて、世界と超越という側面があるとされる。このうち、実存と超越は、それ以外の側面が「内在的なもの」であるのに対し、「超越的なもの」であり、これを意識化させることが脱宗教的精神性の

課題である。ヤスパースは、人間の意識の「主観-客観-分裂 (Subjekt-Objekt-Spaltung)」構造を手がかりに、実存と超越を意識化させる。すなわち、あらゆるものは、意識作用を介して対象化されて現前するが、対象化・分裂に一瞬先立つ「賓主未分」の領域においては、やがて主観となるもの「実存と、やがて客観となるもの」超越とが混在しているという推察から、両者を導き出すのである。

これらの側面は、それぞれ「つつむもの」であり、それは、何であれ対象を絶対化することの誤りを教える。すべての対象は、「つつむもの」の一側面を場とする現象に過ぎない。例えば、超越という「つつむもの」において或る対象が絶対化されるということは、或る神的なものが絶対化されることを意味する。しかし、人間にとって対象となる神は、ヤスパースによれば「近くの神」であり、それは現象という意味において真理性を有しているが、同時に、その背景にあつて決して現象化されない「つつむもの」としての「遠くの神」が失念されてはならない。従つて、冷静な思惟の遂行によつて、「つつむもの」のすべての側面を適切に連関づけ、一側面に固執しないことが、我々の課題となる。

その課題へ向けて働くのが、理性という能力であるとヤスパースは言う。理性とは「交わりへの意志」であり、それは我々が一側面に傾倒し、閉鎖的となることに抵抗する。言わば我々が人間的であるとき、それは我々が理性的であるときであり、またそれは、「つつむもの」の諸側面が適切に連関しているときなのである。

しかし、上述のような思惟の遂行にもとづく理解で、我々のところは、本当に満たされるのだろうか。やはり最後は、全人格を関与させた働きかけが必要なのではないか。それをヤスパースは「内的行為 (inneres Handeln)」と呼ぶ。「哲学的信仰」は、「つつむもの」という思想の遂行と、交わりへの意志に貫かれた「内的行為」による、「あらゆる人間のうちにある根源」(ヤスパース)としての「脱宗教的精神性」への憧憬なのである。

『三源泉』以前の

ベルクソン哲学における宗教性

伊達 聖伸

ベルクソンが明示的に宗教的事実を扱うようになったのは、やや遅い。そのため、初期ベルクソンに一定の宗教性が窺えるようだとその思いから、何の前提もなしに「ベルクソンの宗教性」を語り出すことはためらわれる。ベルクソンが宗教の問題に取り組むようになったのはいつからかという時期確定の問題は難しいが、本発表では、ルネ・ヴィオレットが「スピリチュアルになる手前の形而上学」と呼んだものを「宗教性」に対応させることで「宗教性」と「宗教」を理念的に区別する。そして、ベルクソンにおける宗教(的なもの)の位置は、潜在的な地平から顕在的な地平に移行したと考える。